

運動の特性を味わい、資質・能力を育成する体育授業の実践

森岡 翔平 (埼玉大学)

1. 目的

近年子どもたちの運動習慣の二極化の傾向が新たな課題となっており、全ての児童が運動の楽しさや喜びを味わえる体育授業が求められている。運動の楽しさや喜びを十分に味わう体育授業を行うためには、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための3つの資質・能力を育成する必要がある。それぞれの資質・能力を「いつ・何を・どのように」指導し、評価するかを示した単元計画の中で3つの資質・能力をバランスよく育む授業を展開すれば、児童一人ひとりが自らの成長を実感し、運動の楽しさ・喜びを味わうことができると考える。

そこで、本研究では、資質・能力3つの柱をバランスよく育成する体育授業を展開することを通して、児童全員が跳び箱運動の機能的特性を十分に実感することを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：K 市立 N 小学校 5 年 1 組 34 名
- 2) 調査方法：①単元前後の児童の技能調査の変容とアンケート調査②診断的・総括的授業評価の数値の比較③単元後の児童の運動の特性の捉え方調査での考察
- 3) 分析方法：①単元前と後の児童の台上前転の映像を比較し、研究の手立てによって児童の動きにどのような変容があったか比較した。②単元前と単元後に実施したそれぞれ 20 項目の診断的評価と総括的評価(高橋 2003)により、数値の変化の分析を行った。③単元終了後に児童に跳び箱運動の楽しさについての捉え方についてのアンケート調査を行い、その回答を基に児童が運動の機能的特性を味わえたか調査した。

3. 結果と考察

- 1) 「知識及び技能」の習得について
単元前実施の調査で台上前転ができなかった児童は 16 名であったが、単元後に伸膝台上前転ができるようになった児童は 6 名、台上前転ができるようになった児童は 4 名で

あり、10 名の児童が新たに台上前転・伸膝台上前転の技能を習得することが出来た。技としての「台上前転」の完成まで至らなかった児童も 6 名いたが、安全性を高めた学習の場の工夫によって運動への恐怖心が軽減され、高さのある跳び箱の上で腕で支持して回転する感覚を全員が味わうことができた。

- 2) 「学びに向かう力、人間性等」の涵養、「思考力、判断力、表現力等」の育成について

単元後の総括的評価の結果を見ると全ての項目において単元前と比べ数値が向上した。因子項目別で変化の大きかった項目を見ると、最も変化が大きかったのが「たのしむ(情意目標)」であり 1.57 増加した。続いて「まなぶ(認識目標)」の 1.33 の増加であった。これらの2つの項目を育成を目指す3つの資質・能力と照らし合わせると、それぞれ「学びに向かう力、人間性等」と「思考力、判断力、表現力等」と関係性が深い項目であると言え、「学びに向かう力、人間性等」と「思考力、判断力、表現力等」についてもバランスよく涵養・育成ができたと考えられる。

- 3) 単元後の跳び箱運動の特性の捉え方から
単元終了後に児童に「跳び箱運動の楽しさとはどのようなものですか(自由記述・複数回答可)。また、今回の学習でその楽しさは味わえましたか。」とアンケートを行った。その結果、33 名中 30 名(約 90.9%)の児童が今回の跳び箱運動の学習を通して楽しさや喜びを味わえたと回答した。

4. 結論

本研究の結果、「知識及び技能」偏重型の跳び箱運動の学習ではなく、3つの資質・能力をバランスよく育成する学習によって、多くの児童に対して運動の機能的特性を十分に味わわせることができたことが明らかになった。

5. 主な参考文献

高橋健夫編(2003) 体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント。明和出版：東京、pp8-11.